

私の出会った

喜多昭夫

歌人

H9.10

喜多昭夫は、大塚寅彦に次ぐ私の歌の先輩だ。年齢は彼のほうが若いけれど、いつもそのことが意識にあるので、あとから生まれた兄のような気がする。

自在という言葉はまさに彼のためにあると思うほど、新しくも、古典的にも、いかようにも歌える豊かな詩才の持ち主である。第一歌集『青夕焼』から十年近く経ったので、そろそろ次の歌集が読みたい頃だ。短歌研究評論賞を受賞した論客でもあるのだから、評論集と合わせてぜひ出してほしいと思う。

初めて会った頃の彼は、少年の面影がそのまま、女の人と見まがうばかり、実にきれいな青年だった。最近は何年会っていないので少しは変わったかも知れないが、やはりきれいにちがいない。古都金沢で育ったということと合わせて、近づきたい神秘的な匂い



喜多昭夫

水原紫苑

がした。

喜多昭夫が鎌倉に遊びに来た時に、声をかけられて会いに行ったことがある。何を話したのかも忘れてしまったが、彼のやわらかい金沢弁のイントネーションがいつまでも耳の中に残っていた。「僕が先輩やから」と言っ

て、お茶をおごってくれた。

借りたままの『汽水の光』に春塵の薄く積もりて二十歳を迎ふ

「元氣してるかい？」チアガールのきみは花のやうに顔をあげる

ありつたけの警官隊にかこまれて樺美智子の折れしルージュよ

レーザー光線もて鉱石を砕くときただ風だけが吹いていたつけ

背後より君を擁けば海原に葡萄の房のことき雲見ゆ

鏡から突き出してゐる黒い花 貨車の連
結音に震へて

『青夕焼』からアトランダムに引いてみた。どの一首にもきらきらした詩が濡れながら脈打っている。詩歌以外のものではとらえようのない光や風や花や少女を、軽やかな手つきですくい上げている。甘いけれど、甘さによってしか表現できない世界も、この世にはあるのだ。

春日井建先生や寺山修司の影響は大きいけど、もっとやわらかくて、二人とはちがう現代の「遊ヒゴコロ」(彼の言い方)に満ちている。

ここまで書いたところで、郵便屋さんが来て、置いていった何通かの手紙の中に、何と喜多昭夫からの結婚通知の写真入りカードがあった。おそろしい偶然！ そう言えば、先月の結社誌にこんな歌が出ていた。

緑色の小さき王国勃興すああいへばかう
いふ妻のかたはら

キタアキオ
おめでとう。

(みずはら・しおん「中部短歌」所属・
「NHK歌壇」番組進行役)